

被遊候て、此邊は皆相模殿時分よりの樹木にて候よし被仰。との話共を記載して、左註に、善齋事俗名外記与申由、延享三年五月朔日於御城中中村典膳咄に而承り、追而書入。と朱書せり。或は云ふ。内藤外記は徳川家の旗本衆にて、利常卿の時出入致し、殊に御意に應じ御懇なりしといへり。されば右様老中など招請し給ふ時、相容にも被成、常々心易く出入をなしけるに、玄門寺建立の頃、その寺屋敷の事をば利常卿へ申上られ、賜はりたるものなる事知られけり。但し玄門和尚と俗縁の續き柄等の事は、傳言の趣なき故詳かならず。

○徳輝山普明院

臨濟宗也。文化二年の由來書に云ふ。當院は往古河北郡傳燈寺之末寺に而、境内に有之處、北辰和尚与申住持之頃、寛永十年横山山城守取次を以、微妙公へ言上致し、只今之居屋敷四百四拾歩拜領被仰付、則寺草創仕。右居屋敷拜領之節、横山山城守奥村因幡守神谷式部三人之墨付手前に所持仕處、享保二十一年卯辰類焼之砌焼失仕。尤承應年中より京都妙心寺末に相成、法系傳燈寺より相續仕來候處、

寶曆元年より法系斷絶仕。其後於于只今看司持に相成、當院只今の寺地へ引移候てより、文化三年に至り百七拾四年に罷成候。右之外縁起寄進狀等無之。とあり。按ずるに、往古は傳燈寺の寺中にて、佛林派の寺院なりしかど、承應三年妙心寺派なる千岳和尚傳燈寺の住職と成りしにより、此の普明院も妙心寺の末院とは成りたり。享保二十一年の火災は、改元元文元年四月七日蓮昌寺下より出火し、此地邊を燒亡せしなり。

○金澤山永久寺

眞言宗なり。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開闢、往昔は加州白山にて一王寺と號し、天文八年の頃より寺存在之由傳承仕。其以前之事慥なる記録等も無之、相知不申。其後金澤へ引越、今の御城山に居住仕、金澤寺と改稱仕候。文祿年中之住職は木食長意と稱し、其頃より藩侯之祈禱所に被仰付。長意歿後は弟子俊榮に附屬し、俊榮より秀雅に附屬す。慶長拾年俱利伽羅堂再興致すべき旨、微妙公被仰出、金澤寺は弟子秀雅に附屬仕。慶長七年淺野川河上にて寺地四十間四方之地、瑞龍公より三代秀雅へ拜領被仰付移

轉仕。元和五年二月寺領として門前地五反之所拜領被仰付。寛永四年淺野川寺地御用地に相成被召上、爲替地卯辰山にて九百七拾三步之地拜領被仰付。同十三年寺領門前地五反之所茂被召上、於越中寺地高百石更に拜領被仰付。慶安年中俱利伽羅長樂寺秀照歿後、跡職之儀に付秀照之弟子共及諍論之由、微妙公御耳に相立、當寺住職秀縁を長樂寺之住職に被仰付砌、寺領百石之内五拾石被召上。微妙公小松御在城之節、當寺住職秀縁より献上物之書に、金澤寺と書付上る處入御覽、爲御意金澤山永久寺と可號旨被仰出。夫より金澤山永久寺と改稱。承應四年四月寺領五十石御寄附有之。と記載す。按ずるに、當寺創立の巨細は、傳承の趣も不詳といへども、初め白山にて一王寺と號すとあれば、白山比咩神社の僧にて、往古は白山の衆徒なるべし。さて後金澤へ出で、金澤城山に居仕し金澤寺と改稱すと傳言せし右の寺地は、城山の近邊なる小立野廣坂の高邊なるべし。此の地邊に居たる寺院共、皆山號を金澤山と呼べり。是金洗澤あるゆゑなり。卯辰明王院貞享二年の由來書に、先規は本多安房屋敷地に居住し、金澤山愛宕明王院と

號すと見ゆ、また卯辰國運寺・同妙應寺なども金澤山と號す。此の兩寺も元は廣坂邊にありたるならんか。按ずるに、金澤寺と號せし頃の書簡なりけん、寶幢寺に傳來するもの如左。

眞言宗	
金澤	波着寺 同 明王院
同	千手院 同 觀音院
同	眞長寺 同 徳藏院
同	金澤寺 下略

右陽廣院様御法事之刻御諷經爲御布施、八木被遣付而、相渡旨御算用場に書付遣之候條、被請取候様に可被仰觸候。以上。

閏五月八日

本多安房守	横山山城守
	奥村河内守
	横山大膳亮
	津田玄蕃
葛卷隼人	各實名判